

「親から子へ」



庭の中央に一本の木が生えている。見事に枝を広げた立派な木で、毎年春に花を咲かせ、夏には青々と葉を茂らせ、秋に色を変え、冬になれば庭一面に落葉する。父母亲を送り、住み慣れた我が家の中の主となつた私は、冬を迎える度あまりの落ち葉にその木を伐採しようと思案していた。今年こそはと思い定めたある日、隣家のおじいさんに、「今年は切れますね」と話した時、おじいさんはとても悲しい顔で話し始めた・・・。

私が生まれた時、父が私の成長を願つて庭の中央に小さな苗木を植えたそうだ。雨風に打たれても倒れることなく、元気で大きくなりますようにと。幼い時に父を亡くし、母からもそんな話を聞くことなく成長した私にとって、驚かずにはいられない話であった。

古いアルバムには、私の幼稚園入園式の日に写した色褪せた写真に、幼い私の背丈とかわらない、細く頬り無いその木があった。

そんな私も父となり、幼い我が子にその木の生い立ちを話した。

「この大きな木はパパが生まれた時に、パパのパパが植えたんだよ」

「パパのパパ?どこにいるの?」

「パパのパパも、パパのママも、そのまたパパもママも、みんな仏さまの国にいるんだよ」

「どうすれば会えるの?」

「心を込めて、南無妙法蓮華経とお唱えするんだよ」

親から子へ、子から孫へと、いのちは伝えられていく。

私たちのいのちは、父母、その先にある父祖たちべと脈々と続くいのちの流れの中にある。この世にいのちを受けたことに、私たちを産み育んだことに感謝することを忘れてはならない。

いつも心を込めて感謝のお題目をお唱えしましょう。

